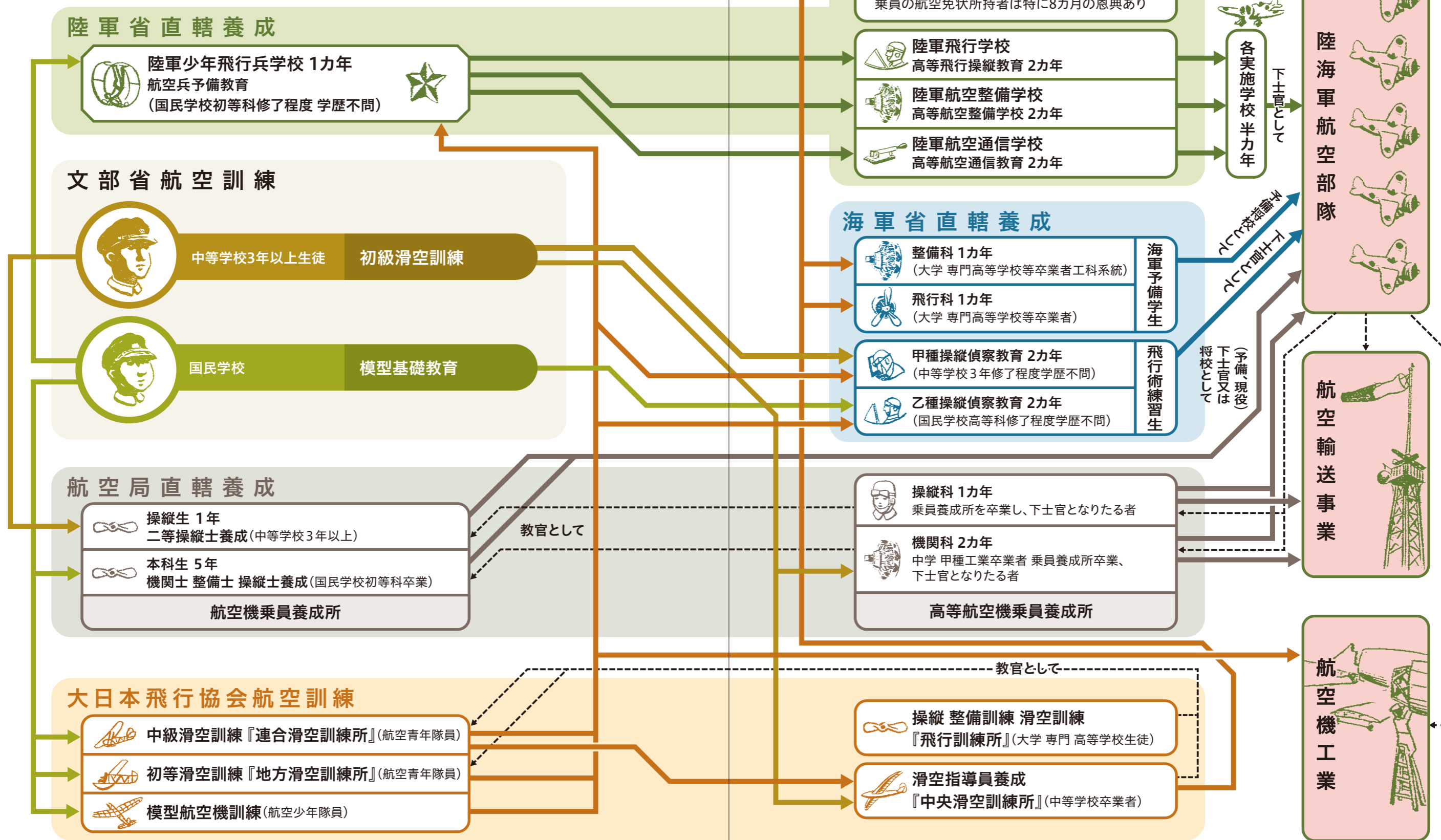


# 青少年諸君が空へ行く道は これだけある



少年飛行兵へのなりかたの図。たくさんの道があることを示して、さそっている。(『写真週報 第289号』1943年9月15日発行をもとに作図)

もくじ

この本を讀んでいただくみなさんへ ..... 3

1 アジア・太平洋戦争がはじまった ..... 4

開戦にわく国民 大東亜戦争/戦争のはじまった日のこと/開戦の夜

●ことば解説 大詔とは？

一丸となって戦争に 俳句 撃ちてしまん/大詔奉戴日の朝

日本軍の進撃 香港陥落/マニラ陥落/マニラ占領/シンガポール陥落

●コラム 大東亜共栄圏の地図づくり

2 日本、敗戦への道 ..... 20

日本の敗北がつづく ああ、山本連合艦隊司令長官/アッツ島守備隊

サイパン島の全滅

特攻隊と「玉砕」 神かぜ/決戦の空へ/練習機

特攻隊員が残した言葉 おかあさん

●アジア・太平洋戦争年表

3 やるぞ、ぼくも日本男子—国のために死ぬことを教えた教育— ..... 34

兵隊さんになりたい 大キクナツタラ/愛国百人一首/志願兵見送り

生きてふたたび還らぬ 兄の出征/われらのちかい

●読んでみよう「天に代わりて不義を討つ」

4 悲しみの帰還と靖国神社 ..... 40

お父さんや先生が戦死 とうちゃんのいこつ/父の写真/先生の英霊に誓う

靖国にいけばお父さんに会える やす国じんじゃの神様に/りん時大祭/靖国神社に参拝して

●ことば解説 靖国神社とは/ことば解説 社頭の対面とは

おわりに —中学生が書いたアジアの友人たちへの手紙— ..... 58

戦争のことをもっと知りたい/ぞっとする/アジアの友へ顔向けできない

表紙写真 右 少年戦車兵。(『写真週報 第246号』1942年11月11日発行)

左 連合艦隊航空部隊。(『写真週報 第200号』1941年12月24日発行)

裏表紙写真 戦陣訓かるた。(奈良県立図書館所蔵)

この本を讀んでいただくみなさんへ

1941年12月8日のアジア・太平洋戦争の開戦から45年8月の敗戦にいたる戦争のなかで、子どもたちは何を見聞きし、何を考え、どう行動したのでしょうか。子どもたちは、日本軍の進軍にも、退却にも、毎日関心をもって、一喜一憂していました。

この巻には、開戦初期、日本軍の戦勝報道にこころを躍らせ、「バンザイ！」を叫ぶ子どもたちの作品を収めてあります。また、日本軍が退却を余儀なくされたり、敗北をきったりした事件についての作品も収めました。今、わたしたちが戦争について持つ感想とはかなり違ったものかもしれません。

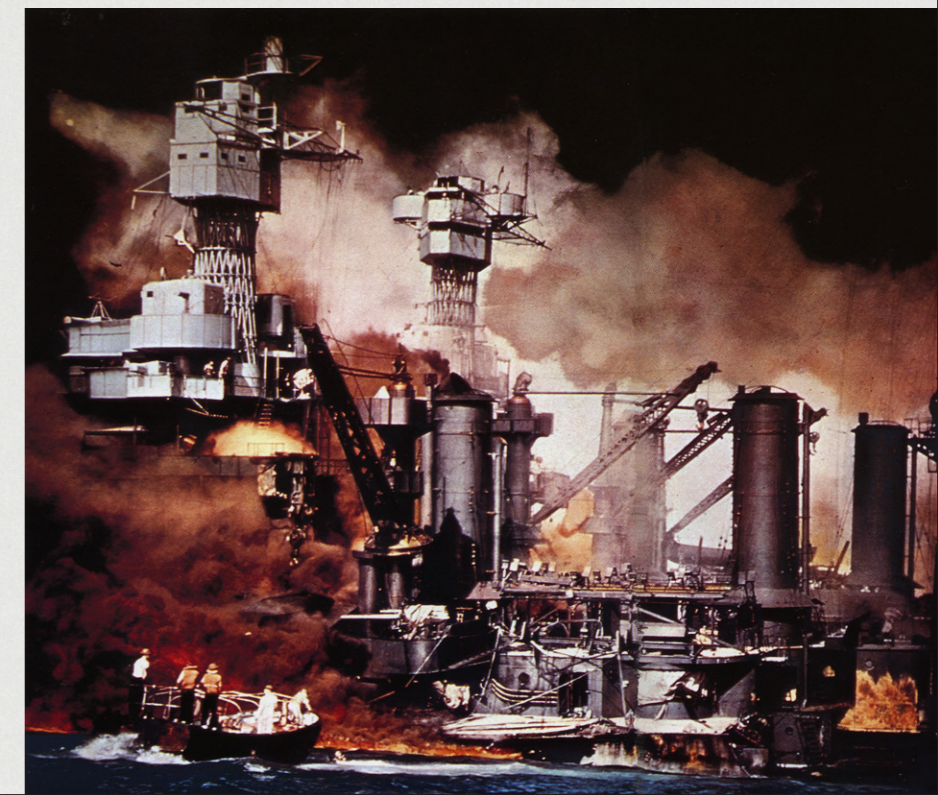
戦争の末期、日本軍に特攻隊が組織され、敵艦などに命をかけて体当たりする玉砕戦法もとられました。多くの若き兵士たちが痛ましい最後を遂げていったのです。この特攻隊の青年たちの死を子どもたちはどう受け止めていたのでしょうか。この巻には、その貴重な記録も収録してあります。みなさんはどう読みますか。

戦争は、多くの犠牲者を出しました。父や兄たち、地域の知人や先生たちの戦死が増えていきました。その死を子どもたちはどう受け止めたのでしょうか。今、みなさんがもし戦争で家族を亡くしたら、どんな感情をもつか考えてみてください。それに比べて、戦争中の子どもたちは戦死をどう受け止めていたのでしょうか。その違いについても考えてみてください。

子どもたちの書いた作品を讀みながら、アジア・太平洋戦争の歴史には、「こんなこともあったんだ」と戦争の事実に向けていってください。

ハワイの真珠湾への日本軍の空襲で燃えあがるアメリカ軍の戦艦。

(『証言の昭和史4 “ニイタカヤマノボレ”』)



## 一丸となって戦争に

子どもたちは、はじめられた戦争を勝ち抜こうと必死になっていきました。教室でも戦争に勝つために心一つにすることが求められていきました。学級で書かれた俳句です。

### 俳句 撃ちてし止まん

山形県師範学校附属国民学校初 六年 男子

米英を撃たすば止まじこの一戦  
 どこまでも撃つぞ米英一億が  
 一億が憎い米英撃ちてし止まん  
 一億の団結あって此の勝利  
 大東亜荒す米英撃ちまくれ  
 米英の邪悪数えて撃ちてし止まん  
 どうしても撃たでは止まじ米英を  
 米英を撃たねば止まぬ大和魂  
 君の為思えば軽き我が命  
 我等皆むごい米英打倒撃滅  
 米英を何が何んでも撃ちまくる  
 米英をあ感激で打砕け  
 鬼共を東亜は怒る米英を  
 一億が米英共に打ち破れ  
 皇軍は日に日に進む南北  
 米英を撃つぞ何くそどこまでも  
 撃ちてしと鍛えに鍛える若桜  
 大詔を拝して勇む全国民

青木 實  
 齋藤 直弘  
 佐藤 幸太郎  
 斯波 英吉  
 高岡 隆一  
 中村 周二  
 新開 隆  
 蜂屋 勝二  
 水戸 省吾  
 千山 彰一  
 鈴木 正安  
 川崎 裕也  
 二宮 七郎  
 稲津 淳  
 秋保 慎一  
 東海林 誠  
 瀧寺 正武  
 會田 良一

(山形県師範学校附属国民学校『学校と家庭』第52号、1943年3月)

1942学年度に書かれた作品でしょう。

6年男子30人の作品の一部を紹介したのですが、「米英」を入れた句が18もあ



たたみ100枚分の巨大さで東京・銀座数寄屋橋の日本劇場正面にかかげられた「撃ちてし止まむ」の決戦標語大写真と、その前で戦争資金集めの弾丸切手購入を呼び掛ける学生。(『写真週報 第264号』1943年3月24日発行)

りました。この時期、新聞やラジオのニュースや学校では、「米英を撃つ」ことに、国民の意識を集中させていったことが読みとれます。それに応えて子どもたちも「米英を撃たすば止まじこの一戦」と高揚していきました。そして、小さいながらも「君の為(天皇のため)思えば軽き我が命」と詠んでいるように、天皇陛下のために命を惜しまない心情が養われていきました。

# 特攻隊と「玉砕」

日本軍の「玉砕」戦が始まっていきました。子どもたちは、それでも最後まで戦う決意を書き綴っています。

## 神かせ

盛岡市桜城校 三年 西川 品三

博多の沖は、  
みわたすかぎり元の船(\*)でいっぱいだ。  
こんな大軍にとっても勝ち目がないと思っても、  
四国九州の武士たちは  
浜べに石がきをきずいて守った。  
一人だって上陸させぬと必死のかくごだ。  
敵はやぐらのある大船、  
こっちは木の葉のような小舟である。  
草野次郎(\*)は、夜、敵の船におどりこんで、  
首を21取ってかえった。  
河野道有(\*)も矢でかたを射られたが、  
少しも屈せず攻めよせて、  
敵の大將を生けどりにして引き上げた。  
こんなつよい武士たちや、  
上下のもののまごころが神さまのおぼしめしにかなって、  
一夜、大風がおこった。  
敵の船はこっぱみじんにくれた。  
ありがたい神風。  
日本の国は神さまがまもっていて下さるのだ。

(百田宗治『鉛筆部隊』アルス、1942年)

\*元の船：1274年と81年の二度にわたって行われたモンゴル(元)軍の日本来襲。蒙古襲来、元寇とも言われています。その時の攻めてきたモンゴル(元)の船という意味。

\*草野次郎：筑前の御家人草野次郎経永は、1274年のモンゴル襲来の戦いで、夜陰にまぎれて元



教科書に載っている「神風」の話。  
(『尋常科用小学国語読本 卷六』文部省、1935年発行)

の敵船に乗り込み、一度に21人の首をもって帰ってきたと伝えられている。

\*河野道有：弘安の役(元寇)で活躍した鎌倉時代中期の武士。1281年のモンゴル軍の襲来の際には伊予水軍を率いて奮戦し、モンゴルの軍船に小舟で乗込み、敵将をいけどりにして引揚げたと伝えられている。

頼みは、モンゴル(元)の来襲の時に吹いたと伝えられる「神風」でした。日本は神の国だから最後は「神さまがまもっていて下さるのだ」を信じていくほかはなくなっていきました。

太平洋戦争末期には、神風特別攻撃隊(特攻隊)が編制されました。「神風特攻隊」とも呼ばれました。特攻隊とは、爆弾をつんだ飛行機が敵艦船に体当たりをする攻撃隊です。

飛行機が「神風」をおこすと宣伝する『写真週報』の表紙。(『写真週報 第348号』1944年11月22日発行)



アジア・太平洋戦争にも航空兵として参加し、のち、霞ヶ浦海軍航空隊で教員として働いた原田要は、特別インタビュー「『戦争のない世界』は私の見果てぬ夢です」を残しています。そのなかで、原田は、特攻隊について、後に聞き取った話として、次のように回顧しています。

「現実には、特攻機はほとんどあたることなく、目標に届く前に撃ち落されてしまう。そして、運よく命中したら、そのことを戻って報告すると、基地の偉い人たちが『良かった』『乾杯』と喜びあう。その有様を見て、本当に情けない、死んでいった人たちの命があまりに惨めすぎると感じたそうです。」

「敵船が見つからずに帰ってきた特攻隊員たちに、『なんで戻ってきたんだ、臆病者』『死んでこい』と罵倒するような荒廃した特攻隊基地の様子（だった）」

原田氏は「『人間を人間扱わない』のが戦争だ」と述べています。

(文藝春秋編『太平洋戦争の肉声 Ⅲ 特攻と原爆』文春文庫、2015年)

## われらのちかい

三重県鈴鹿郡井田川村国民学校 初等科六年 藤田 啟

昨年12月8日。大東亜戦争の火ぶたは切られ大詔がかん発されあの日からもう一年は過ぎた。

皇軍はホンコン、シンガポール、コレヒドールと百年跳の大戦果をあげた。かしこくも 天皇陛下には、この大戦争の御事を深く思召になって、去る12月12日には皇大神宮に御親拝になり、戦果を天照大神に御奉告になると共に神霊の御加護をお祈り下された。まことにありがたく尊い極みである。

僕らは毎日朝会に声高らかに唱えている。

「私は 天皇陛下の赤子であります。

皇運を扶翼し(\*) 奉るために学び

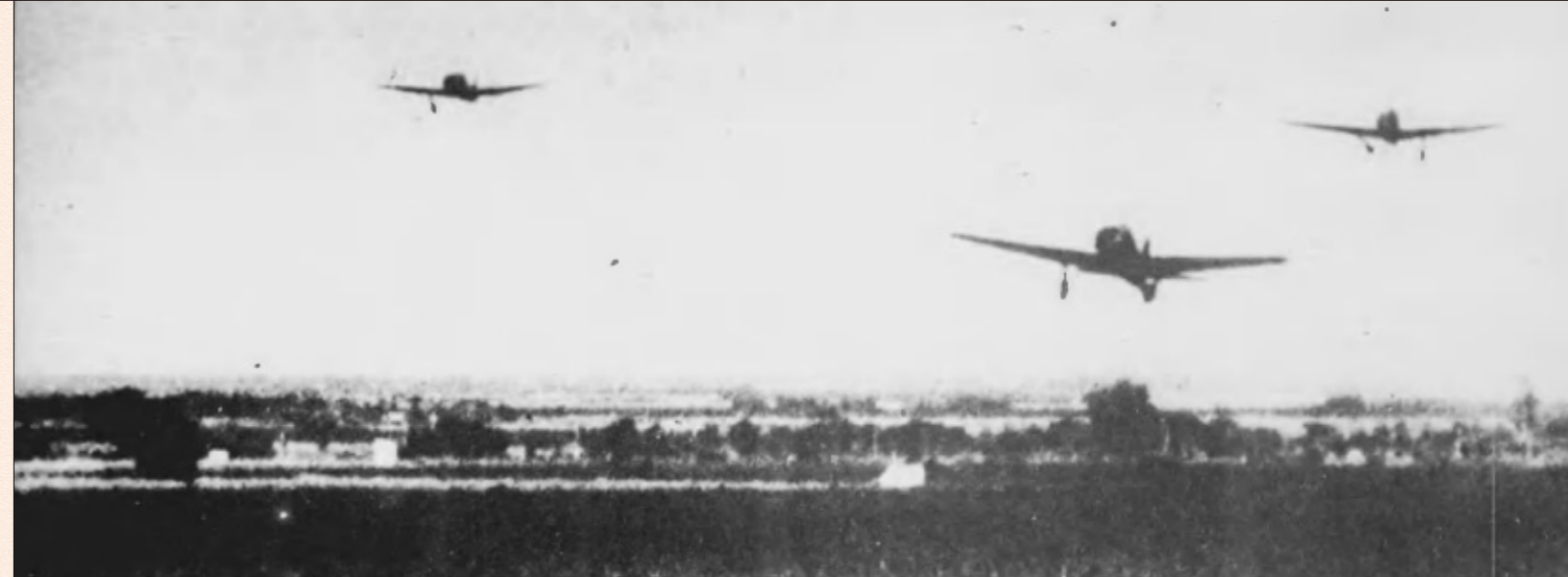
皇運を扶翼し奉るために鍛え

皇運を扶翼し奉るために働き

皇運を扶翼し奉るために戦い

皇運を扶翼し奉るために死す

べきみ民となるため今日1日努力します。」と



基地を飛び立った神風特攻隊。(日本映画社撮影『写真週報 第348号』1944年11月22日発行)



富士のふもとにあった「陸軍少年戦車兵学校」がおこなった「一日入営」で、進む戦車隊。

(『写真週報 第246号』1942年11月11日発行)

戦車の機銃を熱心に見る一日入営の少年隊員たち。(『写真週報 第246号』

1942年11月11日発行)



「一日入営」で、実弾を使った射撃訓練。(『写真週報 第246号』1942年11月11日発行)

